

# 福井の戦国 歴史秘話

## <第8号>

平成29年10月19日発行

### 応仁の乱で台頭し、朝倉氏103年の越前支配の礎を築いた朝倉孝景！

550年前に勃発し、戦国時代への転換点となった大乱、応仁の乱。今回は、その大乱で最も恐れられ、これを機に戦国大名として名をあげた朝倉孝景を紹介します。

朝倉孝景は、正長元（1428）年、越前の守護（国単位で設置された軍事指揮官、行政官）であった斯波（しば）氏の家臣である朝倉家景の子として生まれます。孝景は幼い頃から才知に優れ、ある時、都大路を進んでいた第6代将軍足利義教が、道端にいた幼少の孝景を一目見て“まさに英傑の相”と感嘆したと伝わっています（『月舟和尚語録』）。



朝倉 孝景  
(心月寺所蔵)

応仁元（1467）年、守護の細川勝元と山名全全の二大勢力が衝突。これに、斯波氏の内紛や將軍家の跡目争いなどが複雑にからみ、大乱に発展。世に言う応仁の乱が始まります。細川方は東軍、山名方は西軍と呼ばれ、孝景は、斯波義廉（よしかど）の家臣として西軍に属しました。孝景は、京都での御霊合戦や相国寺の戦いなどに参戦し目覚ましい活躍を見せます。武田信賢（のぶかた）の軍勢を襲撃した際には、討ち取った24の首の前で宴会を開き、“この24の首は、山名全全に見せるため置いたものだ”と語ったと言われ、その豪胆さが伝わっています。同年6月、足利義政が西軍の追討令を出した際には、義廉が降伏する条件として孝景の首を要求するほど、孝景は東軍にとって恐るべき存在でした（『大乘院寺社雑事記』）。

こうした中、孝景に対して、幕府の伊勢貞親（さだちか）らによる東軍への勧誘工作がなされます。文明3（1471）年5月、孝景へ“越前国守護職のことは、孝景の希望どおりにする”と記載された御内書と“御判（守護職補任）が発給されるよう取り計らう”という細川勝元の書状が届きます。この御内書の発給により孝景は寝返りを決断。翌月、孝景の嫡子朝倉氏景の東軍への寝返りが明らかになり、その寝返りに呼応して孝景は越前国へ出陣しました。

ところが、御判は発給されず、孝景は越前国内において非常に弱い立場での合戦を強いられることになりました。守護ではなく国司と称して緒戦を戦ったとされる甲斐勢との戦いには敗北します。しかし、この後、体制を立て直し、翌年の府中攻略で勝利をおさめると、その後も各地で戦を繰り広げ、勢力を拡大。文明7（1475）年、大野郡を攻略し、越前平定を成し遂げました。御判の発給の約束が果たされなかったことで逆境に立たされ、敗戦の苦汁をなめながらも、最後には自らの力で越前支配の正当性を獲得したのです。

下克上の先駆者とも言われる朝倉孝景。越前国の掌握を進め、一乗谷に城を構えるなど、国主としての施策の積み重ねがその礎を築いていったのです。その心構えは『朝倉孝景条々』として今に伝わっています。

<参考資料> 『中世武士選書23 朝倉孝景』、『室町幕府と地域権力』

#### ～戦国ふくい歴史紀行～ [英林塚]

朝倉孝景の墓。「英林(えいりん)」という名は、孝景が出家した時の名です。昔から、越前に危機が迫ると鳴動するとの言い伝えがあります。

【住所】福井市城戸ノ内町（一乗谷朝倉氏遺跡の唐門から徒歩5分）



英林塚

★お知らせ 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館(仮称)の整備用地から、石敷遺構が発見されました！

発見された石敷遺構は、船着き場や荷揚げ場の機能を果たした流通拠点「一乗の入江(いりえ)」の一角とみられ、これまでは文献史料でしか確認されていませんでした。戦国城下町とセットになる港湾施設の遺構が発見されたのは全国初です。

(発行者)福井県 (問合せ先)福井県観光営業部ブランド営業課 前田、塚本 ☎ 0776-20-0762